日本名家经典文库
精装插图版

# 堀辰雄短篇小说选集

日文全本

堀辰雄

[日] 堀辰雄 著

世界图书出版公司

# 堀辰雄短篇小说选集

日文全本

[日] 堀辰雄 著

世界图书出版公司
上海 · 西安 · 北京 · 广州

**图书在版编目(CIP)数据**

堀辰雄短篇小说选集：日文 /（日）堀辰雄著. —上海：上海世界图书出版公司，2017.6
（日本名家经典文库）
ISBN 978-7-5192-2590-2

Ⅰ.①堀… Ⅱ.①堀… Ⅲ.①日语-语言读物②短篇小说-小说集-日本-现代 Ⅳ.①H369.4:I

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第066316号

| | |
|---|---|
| 书　　名 | 堀辰雄短篇小说选集（日文全本） |
| | Ku Chenxiong Duanpian Xiaoshuo Xuanji (Riwen Quanben) |
| 著　　者 | [日] 堀辰雄 |
| 责任编辑 | 苏　靖 |
| 封面设计 | 高家鋆 |
| 插　　画 | 丁天天 |
| 出版发行 | 上海世界图书出版公司 |
| 地　　址 | 上海市广中路88号9－10楼 |
| 邮　　编 | 200083 |
| 网　　址 | http://www.wpcsh.com |
| 经　　销 | 新华书店 |
| 印　　刷 | 杭州恒力通印务有限公司 |
| 开　　本 | 787mm×1092mm　1/32 |
| 印　　张 | 5 |
| 字　　数 | 104千字 |
| 版　　次 | 2017年6月第1版　　2017年6月第1次印刷 |
| 书　　号 | ISBN 978-7-5192-2590-2 / H · 1393 |
| 定　　价 | 32.00元 |


**版权所有　翻印必究**

如发现印装质量问题，请与印刷厂联系

（质检科电话：0571-68914359）

# 出版说明

“日本名家经典文库”系列，是我们为国内广大日语学习爱好者精心策划和编辑的日语阅读丛书，也是今后重点打造的丛书品牌，旨在为各层次日语水平的读者提供原汁原味的语言学习素材。此次推出的作品来自夏目漱石、芥川龙之介、堀辰雄等文学名家以及宫泽贤治、小川未明两位童话作家，具体包括以下九个品种：《我是猫》《夏目漱石短篇小说选集》《芥川龙之介短篇小说选集》《起风了》《菜穗子》《堀辰雄短篇小说选集》《银河铁道之夜》《宫泽贤治童话悦读选集》《小川未明童话悦读选集》。选取的体裁广泛，以长篇、中短篇小说（尤其是具有日本文学特色的“私小说”）为主，亦收录了在日本耳熟能详且广泛传阅的童话作品。

策划之初，我们邀请了研究日语语言、日本文学的专家老师，精选足以代表日本文学的名家名作。所收录作品尽可能覆盖到作者创作的各个时期，以便让读者了解作家在不同时期的思想变迁以及当时的社会百态。也正是由于作品创作、发表的年代不同，部分作品中个别日语语句的

用词、表达形式等，与现代日语的习惯不尽一致。除了特别必要而进行技术性处理之外，一般不做统一修改或添加注释，以尊重原作者，保留原著风貌。

读日语原文，学地道日语，赏日本文学——这是我们推出这套丛书的初衷和希望。在阅读过程中，不仅能潜移默化地提升日语水平，还可以体味不同作者的文笔特色，加深对日本文学和日本社会的了解与感悟。后续还将出版更多久负盛名的文学大家作品，并会推出日汉对照系列，敬请期待。

“日文全本”以全日语形式呈现，内附日式插画。装帧上，我们邀请了工艺美院的设计专家倾力打造，采用了相对古典的日系风格。圆脊精装，便于翻阅和收藏。清新的封面色彩配上大气的黑色腰封，有着强烈的视觉冲击。置于书架上，便是一道赏心悦目的文学风景。

阅读过程中，有任何疑问或见解，欢迎关注我们的微信公众号并留言，届时会有各种精彩活动。以书会友，从阅读“日本名家经典文库”开始。

最后，祝各位阅读愉快！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

# 目　次

曠野
1

聖家族
27

ルウベンスの偽画
67

麦藁帽子
95

燃ゆる頬
133

# 曠

# 野

忘れぬる君はなかなかつらからで
いままで生ける身をぞ恨むる

拾遺集

一

そのころ西の京の六条のほとりに中務大輔なにがしという人が住まっていた。昔気質の人で、世の中からは忘れられてしまったように、親譲りの、松の木のおおい、大きな屋形の、住み古した西の対に、老妻と一しょに、一人の娘を鍾愛しみながら、もの静かな朝夕を過ごしていた。

漸(ようや)くその一人娘がおとなびて来ると、ふた親は自分等の生先(おいさき)の少ないことを考えて、自分等のほかには頼りにするもののない娘の行末を案じ、種々(いろいろ)いい寄って来るもののうちから、或兵衛佐(ひょうえのすけ)を選んでそれに娘をめあわせた。ふた親の心にかなったその若者は、何もかもよく出来た人柄だった上、その娘の美しさに夢中になってしまっていることは、はた目にもあきらかだった。そうしてそれからの二三年がほどというものは、誰にとっても、何もいうところのない月日だった。

が、そうやって世の中から殆ど隔絶しているうちに、その中務大輔のところでは暮らし向きの悪くなってゆく一方であることは、毎日女のもとに通って来る壻(むこ)にも漸くはっきりと分かるようになった。そのなかでは、男だけは以前と変らずに手厚いもてなしを受けてはいた。それはかえって男には心苦しかった。が、女との語らいは深まる一方だったので、男はその女のもとをばもはや離れがたく思うようになっていた。

ところが、或年の冬、中務大輔は俄(にわ)かに煩いついて亡き人の数に入った。それから引きつづいて女の母もそのあとを追った。女は悲歎(なげき)のなかに一人きりに取り残され

て、全く途方に暮れずにはいられなかった。勿論、男は相変らず夜毎に来て、そういう女をいたわり尽してはくれた。だが、世の中を知らない二人だけでは、すべてのことがいよいよ思うにまかせなくなって来ることは為方がなかった。毎日宮仕に出てゆく男のためにもそれまでのように支度を調えることも出来悪かった。それがことに女には苦しかったけれども、どうすることもその力には及ばなかった。

再び春の立ち返った或夕方、女は端近くにいた夫を前にして、この日頃思いつめていたことを口にする決心が漸っとそのときついたように、こんなことを言い出した。

「わたくし達もこの儘こうして暮らして居りましては、あなた様のおためではないのが漸っとはっきりと分って参りました。父母のおりました間は、それでもまだ何かとお支度などもお調えしてさし上げられておりました。けれども、こう何かと不如意になって来ましては、それも思うにまかせなくなり、お出仕の折などにさぞ見苦しいお思いもなされることがおありでございましょう。ほんとうに私のことなどは構いませぬから、どうぞあなた様のお為めになるようになすって下さいませ」

男はじっと黙って聞いていた。それから急に女を遮った。「ではこの己にどうせよといわれるのか。」

「ときどきわたくしのことが可哀そうにお思いになりましたなら——」女は切なげに返事をした。「余所へいらしっていても、その折にはどうぞいつでも入らっして下さいませ。どうしていまの儘では、見苦しい思いをなさらずに宮仕などがお出来になれましょう」

男はしばらく目をつぶって聞いていた。それから急に男は女のほうへ目を上げ、素気ないほどきっぱりと言った。

「この己にこの儘おまえを置きざりにして往かれると思うのか」

それきりで、男はわざと冷やかそうに顔をそむけ、破れた築土のうえに葎がやさしい若葉を生やしかけているのを、そのときはじめて気がついたように見やっていた。

やがて女の漸っとこらえていたような忍び泣きが急にはげしい嗚咽に変っていった……

男は、そうやって女のほうから別れ話をもち出されてからも、一日も欠かさず女のもとに来ながら、以前とはすこしも変らないように女と暮らしていた。しかしだん



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

だん女の家から召使いの男女の数も乏しくなり、築土なども破れがちになって来、家に伝わった立派な調度などもいつか一つずつ失われてゆき出しているのが、男の目にもいつまでも分らないはずはなかった。男の様子が昔から見るとよほど変ってきて、以前よりか一層寡黙(むくち)になりだしたように見えたのは、それから程経てのことだった。しかし男はその様子がそう少し変っただけで、女をいよいよいたわり尽すようにしていた。それが逢う毎に女にはたまらなく思われて、どうしたらいいのか、ただもうあぐね果てるばかりだった。

とうとうまた、或夕方、女はこらえかねたように言った。

「いつまでもこうしてわたくしと一緒にいて下さるのは、わたくしは嬉しがらなくてはならないのですが、どうもそれ以上に心苦しくてなりませぬ。わたくしはこうしてあなたのお傍に居りましても、あなたのそのお窶(やつ)れになったお姿を見ることが出来ませぬ。のみならず、この頃あなた様はわたくしに隠して、何かお考えになっていらっしゃるのでしょう。なぜそれをわたくしに言っては下さらぬのです」

男は物を言わずに、女をしばらく見ていた。

「己がおまえに隠して考えごとなどをしているものか」と男は何か言いにくそうに口をきいた。「おまえが自分のことに構わずに、己のことばかり構おうとしているのが己には窮屈でならないのだ。己だって、もう少ししたら、どうにかなるだろう。そうすれば、おまえ一人位はどうにでもしてやれるのだ。それまで、いま少し、辛抱していてくれ」

男はそう言ながら、ひと時、いかにもいたいたしそうな目つきで女を見た。しかし女はいつかそこに袖を顔にして泣き伏していた。男はしげしげと女の波うっている黒髪を見ていた。それから自分も急に目をそらせて、ふいと袖を顔にもっていった。

男がその女の家に姿を見せなくなったのは、それから何日もたたないうちだった。

## 二

男が黙ってふいに立ち去ってから、それでも女はなお男を心待ちにしながら、幾人かの召使いを相手に、さびしい、便りない暮らしを続けていた。が、それきり男からは絶えて消息さえもなかった。女にとっては、それは自分から望んだこととはいえ、たまらなく不安だった。待つことの苦しみ、——何物も、それを紛(まぎ)らせてはくれなかった。それでも女はまだしもそのなかに一種の満足を見いだし得た。——だが、いつまで立っても、男のかえって来るあてのないことが分かって来ると、わずかに残っていた召使いも誰からともなく暇をとり出し、みな散り散りに立ち去って往つた。

一年ばかりのあとには、女のもとにはもう幼い童(わらわ)が一人しか残っていなかった。その間に、寝殿(しんでん)は跡方もなくなり、庭の奥に植わっていた古い松の木もいつか伐(き)り取(と)られ、草ばかり生い茂って、いつのまにか葎(むぐら)のからみつ

いた門などはもう開らかなくなっていた。そうして築土のくずれがいよいよひどくなり、ときおり何かの花などを手にした裸か足の童がいまは其処から勝手に出はいりしている様子だった。

なかば傾いた西の対の端に、わずかに雨露をしのぎながら、女はそれでもじっと何物かを待ち続けていた。

最後まで残っていた幼い童もとうとう何処かに去ってしまった跡には、もう一方の崩れ残りの東の対の一角に、この頃田舎から上ってきた年老いた尼が一人、ほかに往くところもないらしく、棲みついていた。それは昔この屋形で使われていた召使いの縁者だった。そうしてその尼は此の女をかわいそうに思って、ときどき余所から貰ってくる菓子や食物などを持って来てくれた。しかしこの頃はもう女にはその日のことにも事を欠くことが多くなり出していた。——それでもなお女はそこを離れずに、何物かを待ち続けているのを止めなかった。

「あの方さえお為合せになっていて下されば、わたくしは此の儘朽ちてもいい」

そう思うことの出来た女は、かならずしも、まだ不為合せではなかった。

男にとっては、その一二年の月日はまたたく間に過ぎた。

しかしその間、男は一日も前の妻のことを忘れたことはなかった。が、何かと宮仕が忙しかった上、あらたに通い出していた伊予(いよ)の守(かみ)の女の家で、懇ろに世話をせられていると、心のまめやかな男だっただけ、彼等を裏切らないためにも、男はつとめて前の妻のところからは遠ざかり、胸のうちでは気にかけながらも、音信さえ絶やしていた。

最初のうちは、それでも男は幾たびか、人目に立たないようにわざと日の暮を選んで、前の女のいる西の京の方へ往きかけた。が、朝夕通いなれた小路に近づいて来ると、急に何物かに阻(こば)まれるような心もちで、男はその儘引っ返して来た。男はこんなことで、心にもなく女とも別れなければならなくなる運命を考えた。

しかし、その儘女にも逢わずに月日が立つにつれ、もう忘れていてもいいはずのその女のことを何かのはずみに思い出すと、その女の、袖を顔にした、さびしい、俯伏(うつぶ)した姿が前にも増して鮮明に胸に浮んで来てならなかった。そうしてとうとうしまいには、その女のそうし

ているときの息づかいや、やさしい衣(きぬ)ずれの音までがまざまざと蘇(よみがえ)るようになり出した。

その春も末にちかい、或日の暮れがた、男はとうとう女恋しさにいてもたってもいられなくなったように、思い切って西の京の方へ出かけて往った。

其処いらは小路の両側の、築土も崩れがちで、蓬(よもぎ)のはびこった、人の住まっていない破れ家の多いようなところだった。漸(ようや)く以前通いなれた女の家のあたりまで来て見ると、倒れかかった門には葎の若葉がしげり、藪(やぶ)には山吹らしいものがしどろに咲きみだれていた。

「こんなに荒れているようでは、もう誰もここにはいまい」男は心のなかでそう考えた。

おそらくその女も他の男に見いだされて余所に引きとられてしまったのだろうと詮(あきら)めると、その女恋しさを一層(ひとしお)切に感じ出しながら、その儘では何か立ち去りがたいように、男はなおあたりを歩いていた。すると、築土のくずれが、一ところ、童でもふみあけたのか、人の通れるほどになっていた。男は何の気なしに其処からはいって見ると、もとは何本もあった大きな松の木は大てい伐り倒されて、いまは草ばかりが生い茂っていた。古



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook